

第73回国際理解・国際協力・多文化共生のための高校生の主張コンクール東京都大会 金賞

東亜学園高等学校 3年

フーピエ ウィンティン

課題 ③

生まれや宗教、性別に関係なく、一人ひとりが自分らしく生きることのできる国際社会の実現に向けて。

副題

日本人でも外国人でもない私

本文

③「日本人でも外国人でもない私」

「外国語、話せるの？」

私はよく周りの人から聞かれます。しばらくの沈黙の後、決まってそこには気まずい空気が流れます。

私の第一言語は日本語です。私は、外国人の両親のもとに生まれましたが、生まれも育ちもここ日本です。だから、自分の国籍について聞かれるととても困ってしまいます。

そんな私が一番困ること、それは親戚に会うことです。私は祖父たちとは向こうの言葉でコミュニケーションをとることができません。日常会話程度のリスニングはまだできるので、相手の言わんとすることは何となくわかるのですが、自分の気持ちや考えを伝えることができないのです。自分の名前ですらその国の発音で言うことができないのです。小学生の頃、外国のおじいちゃんの家に行った時、ずっと「日本に早く戻りたい」と泣いていたのを今でもよく覚えています。そこでの生活や文化に慣れていないのに加えて、お母さん以外の家族とはコミュニケーションがとれないという環境が、幼い私には大きな不安とストレスになっていました。

そんな私が一番忘れられない言葉があります。それは、いとこに言われた「またよく分からない言葉を話す子が来た」という言葉です。親戚の人たちと仲良くなれるのかと心配して不安を感じていた私にとって、その言葉はまるで「ここに居場所はない」のだと私を突き放すかのように聞こえてしまいました。日本でも時に差別や偏見を受けていた私にとって、この経験は「『自分』とはなんなのだろう？」と考えるきっかけになりました。

私の母は、こんな私を「恥ずかしい」とよく言います。自分の国の言葉ができないのは「恥ずかしい」と、小さい頃から私を大使館や外国語の教室に通わせたりしていましたが、正直私にはそのメリットが分かりませんでした。自分は日本にいて、日本の学校で、日本語を話す人たちと生活しているというのに、なぜ「恥ずかしい」と言われなくてはならないのか。そもそも、こうした環境で私を育てたのは両親ではないか、と喧嘩をしたこともありました。

日本人社会で育ったにもかかわらず、日本人になりきれない私、かといって両親の母国になじむ

こともできない私。悩んだこともありましたが、むしろ私は今の自分に誇りを持っています。小さい頃から外国人だというだけで差別や偏見をうけてもそれを乗り越え強くなりました。また、周りの日本人とのいろいろな面での違い、そういったことを私は逆に武器として、この日常生活を楽しんできました。そんな自分が大好きです。

法務省の発表によると、日本には現在、三百九十五万人以上の在留外国人が暮らしているそうです。また、文部科学省の調べでは、日本の小中高校に通う外国籍の子どもたちも、公立学校だけで十三万八千人以上いるとされ、この十年間で八割も増加しているそうです。そうした中、世界的にも移民への取り締まりや、外国人差別につながりかねない排外主義的な主張が各国で強まりつつあります。

私は、国籍がどこかではなくて、その人がどこで育って、何を話して、どんな想いをして生きてきたのかが、「自分らしさ」へとつながっていると考えます。人を「国籍」や「言語」という枠組みで縛り付けたり、判断するのではなく、その人が、そして自分が何を大切に考え、どう行動していくかという「自分らしさ」が、これからの時代ますます大事になってくるのではないのでしょうか。その上でお互いを尊重し、受け入れ、共に歩んでいく、といった姿勢がこれからの多文化共生社会にもっとも重要なあり方であると私は考えます。

そして、そうした姿勢をもつことが、誰もが自分らしく生きることのできる国際社会の実現につながるのではないのでしょうか。